「四季・植物」 5　キハダ

学名　Phellodendran amurense Ruprecht
ミカン科
山地に生える落葉高木、雌雄異株

郷土資料から見たキハダのあれこれ

「米山湖周辺には驚くほど大きく育ったキハダが目立つ」(「柏崎の植物」) とあるように谷根のキハダは米山湖周辺を代表する樹ともいわれている。

昔は越後の特産で、しかも需要が多かった。現在国内では、次第に取りつくしつつあるので、貴重品になっている。

キハダは字が示すように、表皮をはぐと鮮やかな黄色の内皮がある。この内皮を乾燥し、生薬の黄柏とするが、皮をかんだだけでも非常に苦い。キハダのエキスを主成分とする「陀羅尼助(だらにすけ)」は大変苦いので、昔、僧侶が「陀羅尼」を誦するとき、眠気ざましに口に含んだといわれる。

また、「だら助は腹よりは先ず顔にきき」(天保年間) と詠まれたことからもその苦さがうかがえる。(「柏崎の植物」)

柏崎にも「陀羅尼助」を奈良県の業者が売薬として、巡回して売りにきた。ダラスケ売りといわれていた。

キハダの胃腸系統に利く効用は古来から有名であり、大の酒好きの人が谷根のキハダの大木をみて「この木1本あれば俺は一生二日酔いしていられるのだがなぁ」と言ったという話もある。

参考資料

「日本妙薬全書」	現代民間医療研究会編	1976	「谷　根」	月橋　奈著	1978
「新潟県の薬用植物」	木村雄四郎著	1974	「柏崎の植物」	柏崎市教育委員会編	1981
「薬草図鑑」	伊沢凡人・会田民雄著	1999	「柏崎市史資料集　民俗篇」	柏崎市史編さん委員会編	1986